

北
環
海
異
聞

洋学文庫
文庫8
A 202
6



44
118
225
6



環海異聞卷之十



大槻文庫

國王の目見以來之次第

ガラフシの宅より十四日逗留せしと覺へ五月十九日
至り明十六日國王の目見被仰付の間兼て相渡置
日本は立新服着用何事も可罷出旨申渡さる此
日ガラフシも先達て出仕せり命有て各前頂を
剃り月代頭となり装束調ひ民之助辰藏八三郎
善六茂次平己之助其外歸朝の四人都合拾人
相揃ひ四足馬の車よのせしきて罷出たガラフシの宅
より三四丁程ありと覺り王宮町の内ふありて

城造りとも見へる屋鋪構への如くなり一方は川
流を免く三面を廻り堀へ館内地形高が六廣
二町四方もある魚へ門内より番人と見へ西側は
二人宛銃炮を持罷在り表通四面高き長屋の如く
石造り内宮へも立て續き宮殿一躰五階作り由
一階毎に硝子障子あり外より望み見ると其窓
より五階の事追々知まくなり大門の幅兼車五輛
並へて自由は通行なり程なり案内の役人附て何
殿中へ入りしは此先より自然と高く昇る様
は覺の故に幾階と云ふ事知らざりし三階目と
いふ所は外へ通るの家より内宮の敷間の際石橋



を架す横幅七八間程あり其橋の上は厚く土を置
き往還の街道の如くなり其両脇は松と櫻との並木
を植へ橋下も唐門の如くなりて車馬も通用なり
殿中間毎に一番士並居外は兵具杯尤間毎に硝子
障子なり又窓の無き方より半間置に一丈二尺斗も
あり大鏡をかく抄き故に至てありき奇麗に
坐席多し皆板敷拭縁なり其上を皆白く皮水白を
たきり上下す

造築すべて石造り其石の合せ口は鋳かたかた
拵の穴へ鉛を注ぎ込めて墨ミしり
るものよし尤所々隅櫓の如き高き

塔の如きものを建宮殿内外造巧の様子
更に見分るを更を得ん

目見へ前役人先き立其目見への場所間席を
見せて指圖へ置き程なく目見なるへの更
ありし帝王食事の刻なりとて半時をり之を
居まり間もなく其場所へ出さる羊の長知と座順
を定免らる側へ役人四五人指添ひ居る右役人の内
何きも申聞せし目見への時尋らる更もある
各此国へ歩たきとも又歸國つて度共存念次平法と
直に受可仕と心付せり彼是する内其席前より
先き立して帝王を始先母后皇太后弟君一同

出らまはし母后をハ帝王自らキを掣き出左并

あま必ず九キを用わらむとせ
彼国の風俗より九キを重す

王の相懇恭々敷威嚴あり

勿躰なく懼敷き様を覺へしり皆々坐りて首を
下け平伏せんしり倍々附添し役人此国ハ立ちて
見わら禮敬なり平座する事なりまことつひに故
何を茂起ちり少く頭をさけ居るまハ母后歩を進の
来りし並居る者共を見たり自ら指おさるる何
ちぬ當今様おたすハ王の弟君こたすハ母后と云ふ
告げあせせ夫より帝王も又進寄り玉ひて直に問は
你等本國へ歸り度歎とのたまふ何を哀れりまハ
かう傍より申せしハ當今様ハ你等歸るも止るも無

理よ、仰付らまはし心任せし由請申上るゝとく此取まて
茂次郎己之助の兩人、歸朝の心願同意なり。此日
帝王自ら問まこし節如何心變へしや。私共ら
此當國より歩りや度きと言上す。津大夫儀平九平
太十郎四人、何れも本國へ歸朝仕度奉願。十年程
他國に罷在偏に歸國仕度と答や。且り九、新藏帝王領
せ玉ひ成程歸り度思ふ。甚と尤の吉なり。四人の
者の肩へ自ら手を懸らまはし。のこまへり、彼國より歩り交
の者ハ手を懸
す物とまめ玉のけ
いふたゝる心よや 相尋君皆々の者へ向ひ日本よて信仰せり
神、まといふと問へん。とて、帝王問ふ。及も其事
を制せらる。月は己の氣色なり。故此問半途

よして止めらまはし。后も美麗なり。は衣束よて側女
中と見へる者五六人附添本座あり。近付給へば
之ハ程隔りて立ち玉へり。年若き、女姓の吉なり。こえ
恥らひ玉へ吉又くと思はまはし。

帝王の服飾結構は藍天鷲絨の羅紗
と見えたる肩下は銀絲の星のほききる物に
義敷き、コシタとよみ、このをかきまはし。身
君の服飾の星も金絲なり。大略雜事
部
冠とよみ様の物をなし。王の名、カシキサシダラ
ロウイナシと称まはし。此年廿七歳とよみ。母
后皇后共、西岳珠シツクの孔を穿ち、何れも美

事たるものを垂下けて襟へも金玉を貫きたる
数珠の如き物をおく后を収めての如き形の
至て羨しきものにて髪を結ひ針にてこめた
る様子見ゆ

男シテ女何事も髪へ白き粉を少くかく銀髪
の様子見ゆ

母后の名「リアヒヨータロ」

后の名を不聞子イメツと云因う嫁
来らま

弟君の名「シノキノバウロイキ」
年廿三四
見ゆ

一 此時王は附添少近侍の人を刑ラハの外に入
も見へは椅子其外坐中飾物もなし平
常ハ二階に任居の

一 殿中芝居坐もあらず様子見受

梅は芝居座と言ふ我方よりの能舞臺
とも種類あり

刑ラハ何事と傳へ今日珍敷見物あり所有は
是より直に其新遣一見為仕様よと王命なりと
申さる何事も難有と申受し并謂諸夏首尾能済
帝王始皆々奥へ入玉ひ何事も殿中を退出せり
珍敷物として船の上は大珠あり其珠は

袋よ風を籠め虚空よ飛行せしむるや
とふ物のよし此日国王の御覧ある筈よ
仕懸しと申す

按よ此珍物一見の催しある日を擇ひし
日本人目見へも言渡し済て後すし
是をも見物や付る評儀よ有しと申
ま

王宮一郭を構へし物て見ゆまに城構へ
し聞得し郭中一躰よ五階作りし造り
建てし宮殿と聞ゆ内へ入りて其段階を
なすを知らず得がしと言問毎の窓よ

五階なりと言ふ説を信し思ふ迄よ造
りたるものなるを兵へしとあり再三是
を問尋ねても詳し語を得し唯造建
廣大精巧を盡せし事と思ひやと云
王宮に漂流人并謁の式極老て跡畧無造
作の事よして東方の俗と云ひし差ひたる
言と思ふに己よ光大夫の女帝へ謁せし殿の
事或聞しよ是と相似て猶馴し親しかり
し様よ聞ゆ因て按よ是は異国人見物杯よ
て國典制格をたれしは形よありし諸官職よ
品階次第もありと聞ゆまに下等外官の輩よ

内宮の近付まも得ましく官人のごとも夫々
謁見の法式あるまはるべく既に彼地を留
へしと言ふ者共ハ詞も掛らまに歸朝願ひの者
をうへ親しく物つたまはる格外のまはる日本
人なる留る者ハ其國の賤民に歸るもの異邦
の人其國に有る身至尊の位すことハ彼は
何そ是故賤くせんやなごころ心も思ふ必ずその
国人は謁見拜禮の式ハ夫々法令有るまはる
併その實をたゞさきハ己の臆説の
一 国王夫婦の肖像布地に油繪彩色を
なる物二枚を太士郎都府に求めりて推乃

来きり神彩實に生ける如く服飾美を
盡せし状全く写真に見ゆることまはる一度
御覽をも経く相下りのを模写せしめて其
圖をたぐり出さ

此月像賣物として国中いづらも有る

按は彼地方ハ国王の眞容を生写して遍く世に
見せしむる為まかくするまはる聞ゆ成ハ歐羅巴諸州
の金銀錢貨を見るまはるり小多くハ其國々當
主の面顔を鑄付るなり錢貨部ハ女帝エカテ
リハの像のつきまはる金銀云々是を併せ知るへ
是国俗ハ異とする小足らまはるま成るや



魚目西亞國帝王夫婦小月像

退出より直く役人案内にて車小乗り連て其見物
事の場所へ行く其上取ハ都下を流るる「子じ」といふ
大河のむらふまある「ワシライツ」蘭書トワシレイと「ふ嶋」
厄花河を舟橋にて其所へ通用を此船より大
造のもの四間程の船を三十六艘銕くさういふく
繫き付け向ふの岸へ渡せり其並へく船の上ハ厚板
を敷ならく丸石小欄干をほけ車三つ並へ通らう
程の幅なり其欄干の外両端の所も人の通用出来
る程の間をわけ又敷板の末端も欄干を付け
二重らんかん往来車馬従歩自由よ出来る
様は仕掛く船橋なり是を渡りて此の字梁ニ取
程有と聞り

島の内は列りし餘程廣き場取なり四方の
岸々も大砌石にて築き建てたる石垣なり銕の
大環を前々小附てあり其環も大船共を繋ぎ
置りり其見物場所も圍有り入口小門番人
居る内へ入まハ見物人夥敷群集す
暫く有りて国王の入来あり其前小車より下り
カラ先き立なく國王も母后の車を切きて
参りきり
廣場の真中小小船の上に仕懸く大毬
をすく置繩をほけり西方より是を持ち
居る毬なり大球もぬりて有り

船の大き、一間程もあるへきり、滔々二人乗るへき程、
其正中、大球より、袋有、大さ三四間程も有
へ、縮地の蠟引より、物の様、見ゆ、船の内人、金ハ
其袋、天窓の當り程、扱其袋、風一を以て、充滿
せしめ、見へぬ、動き、持ちし、ひく、綱を
放せ、直り、升らん、とす、勢ひ有、国王、入来の後程
なり、其船中へ、男女、二人、乗り、殺り、小旗を、手、持
廻り、居り、見物の大勢、向ひ、旗を、手、廻り、何り
物、ヤ、きり、是より、様の放き、し、仕懸物、なる、首
尾能、忖り、なり、皆様の、由、與、も、入、り、目、を、こ、え、て
中、覽、あ、き、只、今、飛、升、る、也、こ、り、様の、口、上、の、趣、聞、へ

其控綱を、持、し、人々、是、我、引、也、き、て、を、れ、き、ま、ハ
船、の、袋、は、從、ひ、ぶ、ち、と、と、上、と、見、へ、り、次、弟、小、高、く
虚空へ、飛、り、さ、り、群集の大勢、天を、仰、き、て、を、り
か、は、是、を、望、む、り、暫、時、の内、は、な、り、見、ゆ、程、は
升、り、先、夫、より、南、へ、指、く、横、に、走、る、様、見、へ、り
忽、ち、其、影、を、見、へ、ぬ、様、な、り、さ、り、圖、丸、の、如、し

風船飛走圖



一 此船の仕懸程 厚くして見し度なきは 詳し覺
こめぬ 大袋の糸をはり船に 繫き置けるもの
様に見の雜説をきくよ 大袋の下の所別々袋小
ちる紐の如き物ほりあり 大地より下らんとする時を
此袋紐より 大袋の風氣を縮り 落して段々下へ落
着く仕懸りなりとや 尤船中 遠目鏡を貯へ置き、
其下らんとする場所を見定め 落下さる度由

一 此器 他国の人の工夫して出来たる物にて 此国にてを
始きて見たる様子あり 其國より 爰に召さま来り
しとや 國王も 此場所へ臨幸ありて 一見せしは 世を
故と思はる 此取南の方某といふ所迄飛行して 落

着く つもその由の外 一二里も 千載の地へ落さるると云
依て 不首尾なりしを 再び仕直しの事や 立仕懸直し
并せけるに 其節を 約束の所へ 亦しも 違はぬ 落着き
あるは 二度目の取を見や 思ひの終り 行る取を
此所より 四スクワの都迄も なるなる 七百里の間
此物何の事ぞ 何の用を なす物と 聞よ 及も 人々
こまを「シヤリ」とや せしあり「シヤリ」ハ 凡て 圓き
球の度なり

梅は 何を「シヤリ」といひしなるへし

女一人を 必ず 同船する 度と 聞ゆ 舟の仕懸を あやつ
の役女ありしは ありぬ 度も 有るや

此日辻々へも張札をな〜人城あつた〜様子なり
其所迄見物に行き〜その代錢も寄せ〜その圍め
其日ち町々よても心城つる空城望〜居て其飛
行の様子を見て人々魂を消〜さる〜也

使節船長崎梅崎へ上陸〜旅館滞留
中の慰〜紙よ〜一つの圓き玉をとり下底
よ口をある拵火鉢は小柴の火を焚き
是至てや〜火氣なり其のト〜
右の紙袋を益オホひ其煙と氣を袋の内へ
籠の〜袋の内へ〜煙も〜取
天上は升ホせ〜紙カ鶴ボの如く獨り〜空よ

よありきり 用い土地の人々怪〜見
内は水主町〜所の人家の屋上は落
けまわら〜煙り〜此煙の舞出せ
〜火災の容子〜仍て鎮火の人々
寄集〜大騒き〜火事よ〜
其球の落ち破さ〜籠り〜煙の〜
た〜故其喜〜皆々退き〜
此節怪〜業い〜疑か〜
色々水糺聞あり〜其次弟分りて相濟〜
〜是球は氣を含ませ其氣の力よ
虚空へ升せ〜仕方〜見ゆ彼ヨヤの飛升

すらの理是と同一して略義あるも但大小
強弱の差別あるもてなるを以てして

此袋を割る糸を付て引あけ三度も
升せ試みてよみてあけしと云う

按よ此器の圖天明の初年江戸参向
の和蘭加比丹某壹枚摺よしとて持奉

是去年本国より渡せり我國人も未

其の物を見ざる由なきも新意の奇器

之と板行して咬啣シヤガメラ巴天竺地方の海島にて此中
ハタヒアと云所和蘭の領地

また指越せしやうとて推乃来しやう某

候に呈せり其の名を「リコクトシキツプ」と云

よしこれハ氣船といふ又其の圖例は

略説あり茂竹是を得て和解を成し

此器を近時柵郎察國の都府把里

斯とて所は新制衣とて和蘭よて

是を「リコクトシキツプ」氣船の又「リコクト

スループレ」リコクトトと云氣スループレ
小船の事なり又「リコクトバル

此ハ球なり頃日は併考し小魯西亞にて「リコクト」と呼
へるもこの儀よて何と云ハリしと云くはなり

等の三名あり柵郎察國「リコクト」

把里斯の
内ありと言地の「カルレス」エニロベレと云人

創りて制衣作す船の長壹丈餘幅四尺

餘深さも同し人二人を載すべしと云々

森島氏此譯説は圖を併せ紅毛雜話

中ニ載せて公行せり但此圖説の支和蘭
人之ことも當時新奇なる傳聞を記せ
まつて其物をも見ん其證をも得すと
聞へり吾輩是を思ふは彼の窮理の
因俗天地间弥満充塞せり空と氣の理を
窮むる豈日一日より精且密なりや
聞ゆ其理を窮めたる如より虚空の氣
加又舟をり風を御せむへり之工夫
なるも併其實を聞見せざる如何
もやと評せり豈既より久しき後亦
和蘭將來此圖を遍額に作りし物

あり享和の年

オランダウシ一譯官

某是を諸侯

呈しり吊し是故示し玉ふを見る小田圖

と大ひは異なり其圖下は小記あり譯官

ヤルシニテスチコイレリース

拂郎察の都府と
把里斯中の地名と

所のカルレスエトロベル止といふ人氣球といふ

之のを製衣し并せ試むるの図といふ豈く

拂郎察といふコロベアエロスタチウと

いふ是と氣といふ擧るる球と云義と見

ゆ其下は曆數一千七百八十三年彼十

月初旬と云數言あり是を我天明三

年癸卯にあらず當文化三年丙寅

また二十四年前より見へり新舊圖
形状稍差へりとのとも右曆数の
項試み製衣するものと見へり但未
其實否を知らずと云ふ此度漂客
等やトルバルカシよて目睹しと
云シヤリレも全く此物と覺ゆ依り
舊圖と新圖の額とを比べ彼者共小
示せしよ旧圖を知らず新圖の額と
なせる物を見て完爾として云ふ
筆親しく見れば如の物なりと此圖
の如しと云り依て顧るは旧圖に始る

試みよ製衣する物の圖新圖に己も試
得しよのよて此時天明の三年の頃あり
まると知る彼等傳聞に此器近
来の新製衣且他方より推乃来ると
魯西亞国王も初めて見ると云々の
説と一々符合せり我輩初めて其圖を
見て其名を聞くと既よ二十年をくは
りて我々東方の民數万里外の遠
遠絶域に漂到し親しく其實を見て又
と云ふ本邦へ歸朝せし一奇は
亦其實證を得しよ不可思儀の異

聞たり真に一奇器と言へし但其
造巧と要用と如何と云事を知るべし
さるのこ然まとも沈研潜思と細不
考の理を曉り彼長崎まで戲弄せし紙
球の話と併せ考へた思ひ半は過ぐ座
き事小や

ある日右のシライツケの島の内カスカムリと云処あり
此所へ見物よはかこまきこは是ハ諸國の土産物とい
異とすき品々を貯へ置く所其内へ入りて見ると
は用帳の靈寶場のおとくくまきくまき廻りて見る様
仕懸け一列毎に千の何と一々見留められ又見ると

何物とも其を辨へし其品々は張札付札も有とも
文字を知るときハ讀分る様も形も数千百種の
品々ハ異物目を驚かせし迄あり禽獸蟲魚の類
ハ薬水に浸し薬酒に漬てあり又箱入壺入等も
物も多し其中目立たる物多し

象の骸骨一具枯骨故其支節々をば
なまき合せて全く備へしもの
物の丸むき腹内へいつめ物して全形をなま
尤眼玉玉眼を合し其状生ける物の如し
是も国王の愛物の斃しもの城が制衣
して其形を遺せりといふ

薬水に納めたる胎胎の全身に長蛇の蛇の如く
きの如く巻つゝ物あり是はいつ成物と云々
たる小大難産して遂に死に至りたる婦人
其腹を解剖し其は如此の胎有怪物故
と云ふ後世の爲にかく蔵の貯へ置
と云ふ

大きう竹 是は此地方に産せし物故
珍物と云ふ蔵に置くと見ゆ
雁に似たる大鵝と惣金梅と羽を動か
す様子をみる作り物有り其羽動く事
生物の如く

是を置くと棚の下に金作りの鶏あり如何の
仕掛りや時を報し又其脇に鵝あり
是は目をくく廻る様子をみる作り物
又其下は蟻蚱の作り物あり跳行く変生
の物と云ふ

男女の陰陽共七八寸位の物各ぬすこ入
りて薬水に浸し置けり是は變生して如此
分外の大物なり者あり故死後これをも
至て如此貯へ置けり

世界中諸国の衣服を集めて置ける所あり一向見馴れ
物共なり其内唐人は装束傘履など見へり

此中よ日本人の服もあつ見覚へあつやといふの違ひ
まなうや見分けか〜彼人指示して是なりと云
を見まへ故郷よて貧民農夫杯の着用する上針
とて刺し綴りある古着也 江戸まで志すまともたしうは日
刺子云
本服共覚へ〜何より此方の紋あつらふて於て極
先て我ら国の物とて支を知まう

是を布帷子木綿單物又木綿布子の引
きの類を〜め紋付なりし物のやま損して
其後用ひか〜物を二枚あをせて麻糸
よて帆木綿なるもの如く刺し〜を針と不
紋付よかきま〜支なるぬもれて弊衣を

かく刺し綴りて農業者漁獵等の時着用を
此物全く〜是を諸邦の盛服と並へ
はらぬ有〜恥〜支や思ふは是むら
南部津輕濱邊の者なと漂流せし者共の
着用せしを異方の者〜珍敷思ひ召上
て此所よ納め置〜支と見あ〜

世界の人物七十七品あり皆此都より来り居るや故よ
言辭も七十七通り有と衣服の制衣も抄〜差へある
〜
按よ滿世界の支あらハ何れ七十七に限る
〜きや必き〜違へる事ある〜

又按るは此ハスカリーモリトシハ名ハ何ト云々又ハ
光太夫ハモスカラートト云所ハ珍物を集め
所ありところ此物語の大略を以考ふるは是
古来萬邦世界中の珍物異品得るは任
て儲藏するの府庫と見ゆ考證となし珍
とし奇とする物千種萬品見まらざる物
共なる也一頑愚の漂民皆耳目は觸ま
ざる物のこまて何よ一つ見分ハ極き様もな
しなる一唯せざる物なる思斗り見覓来
るハ遺恨云々なり

此近所ハ大ひなる球を藏む所を見せし其の家

石造りより十間程もあり二階作りハ石の錠を用き
内へ入まじり

其内へ入まハ四間程もあきき大球有り其
球より子のまじり内ハ空虚ハ此球の内へ入
三尺程の口あり中へ入まハ大空間なり腰かけ
有り各是ハ腰を掛し大佛の胎内へ入
り如く相如何の仕懸の物ニ方の螺轉を廻
れま内輪旋轉ハ入口ハ塞し上の方
ハ月とあまの星ありをまじり腰を掛け居
しより更ハ動り又螺轉を廻せるは廻
方違あまや入口の戸始めの如く

あり其旋轉する様子なりと何といふにけ
のそのう又如何の仕掛物成るや辨へざる言
なり夫より二階へ登りしるは廻る板縁まで
真中ハ圓くくわうあけぬ如く其形より球
とへ半分もあつてきたる千より是を望め
ハ球の表ハ滿世界の圖取りなり廻をせハ諸
国の國あつたるやハ我ハロシア國土かこハ
此この本國日本なりなりと指示しおもう

此者も亦シヤリと言ふよ象球きをシヤリと

ハへへとく
物と見ゆ内ハ天象を示せる物なりハ腰

掛の所も地平の心もや候夜の象のこ
見せしる様子なり天象もロシア
北邊地方より望む処の星象のこなる
へきう其造巧の意側り知りかこハ表
全く地球と見ゆ球を望む処の板
縁ハ直ハ地平の意なるへハ是又詳ハ
せざるを憾とハ是無推無心の己む
事を得ざる所なり

ペトルブルカ都府圖十四符ハ象り
既今ハ「ホルステイ」の地より輸せる
天地球を安置すと見ゆ或ハ此處なる
款

右天地球の圖想像して作る処の略図内天象を
示せしものきりけて曉命にかゝりしつゝも其
畧話よりして思ひぬりて圖を制衣するも又
尤の如し



環海異聞卷之十終

環海異聞卷之十一



環海異聞卷之十一

國王の通行し玉ふを直し見しを更なりを飾
たてきり車馬なりとす

一 漂流人外出し節が最も言如く毎度
車馬なり是は異国の人故或は人々集り
て見物ありてそのまはる作法の事より
見せしもの如くありてかく取扱る
と下知ありしよし

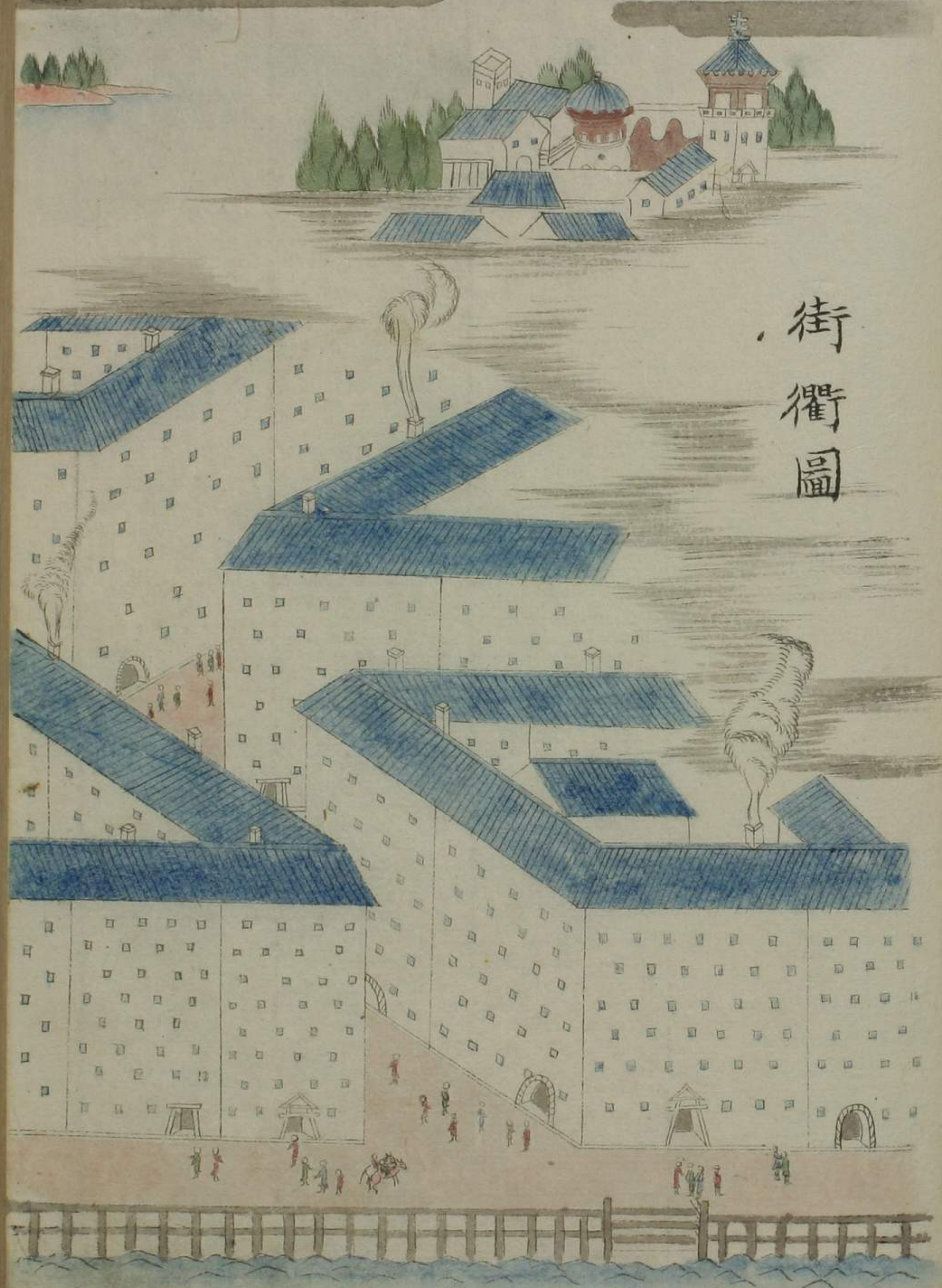
先帝の暇を通行の節車の馬数百五

十足又々二百疋もあつては間合は今もおの
てハ質素素専らして馬数四十疋かりして
間を合も是きふても其用足るとり
おき故に無用の費せし前時比
は物更簡約や是歸帆の船中使節の
物諸なり又曰我々ハムス
クハ近旅行の取ハ格式の通の供人数なり國王の行幸
陪駕の同勢到て不足故我々往來に見違ふ様
はつり

居館の前より且輕教百人一組々色替りの將東
をかり鑊炮の且場揃をなも此時國王并高
官の人々馬に乗り出り出り点檢せしるよ
月三四遍もあるは是ハカシキリセンヤと云日

はあつて且輕各鑊炮を持ち肩並且並を
揃へ初り出り王の見分の前をとり返り通
別は伶人立居り其行列を揃へ取笛太鼓の鳴
物をかり其拍子に應じて進退をよし此見分濟
此日王直く館内にある寺院に詣てらるり
なり是ハ噂に聞け其式を見ん殊の外嚴整
なる事又れ

都の廣く日本里数の二里四方もある
一町の長さ日本の一町より少く長きかと
見り
按り里数の更本篇より詳し



街衢圖

町々辻々屋作り石造り結構まで皆さう揃ひて立
 流なり家作り富者の者のミヤ合せて造築する
 事故如此能家並堅固なきも極ふん之世貧者の
 分も皆其借屋に居住をたも併貧者とも極貧
 の者といふ訳よあゝいゝやゝの大造の家作り自カ
 出来思といふ程の莫く堀川縦横を通りて江戸御府
 内の如くに見ゆ

一書物店呉服屋時斗屋なども多く見かけあり

大光曰んて高店ハ別よこざりてちう二階と下屋と二階
 簷下にも人の往來の通りあり町並ハ市店よあゝい
 皆六階作り人王居ハ五階作りとも宮作廣大に惣て下屋
 土間小く物置二階ハ厨三階ハ住居四階以上の庫蔵
 の用とすともなり

瀬戸物屋もあるよし其共是見當らる

一 遊女屋あるよし是亦不見 凡そ妻女ある

者も遊所へ行支停止のよし市中芝居坐も

あり

一 途中乞食も見掛まら

一 穀物等小賣有りて自由なりと田舎より

小賣と言言支り

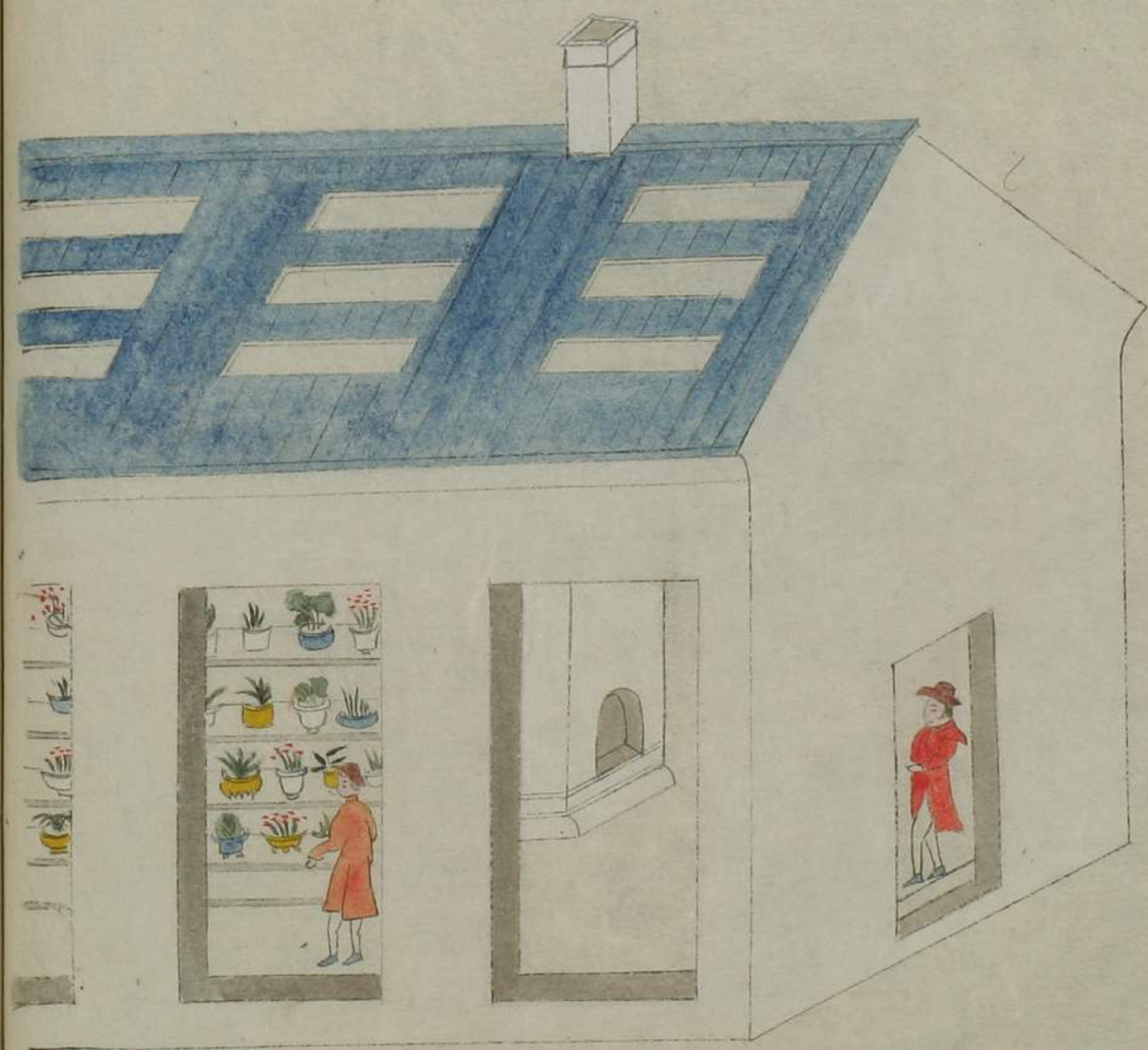
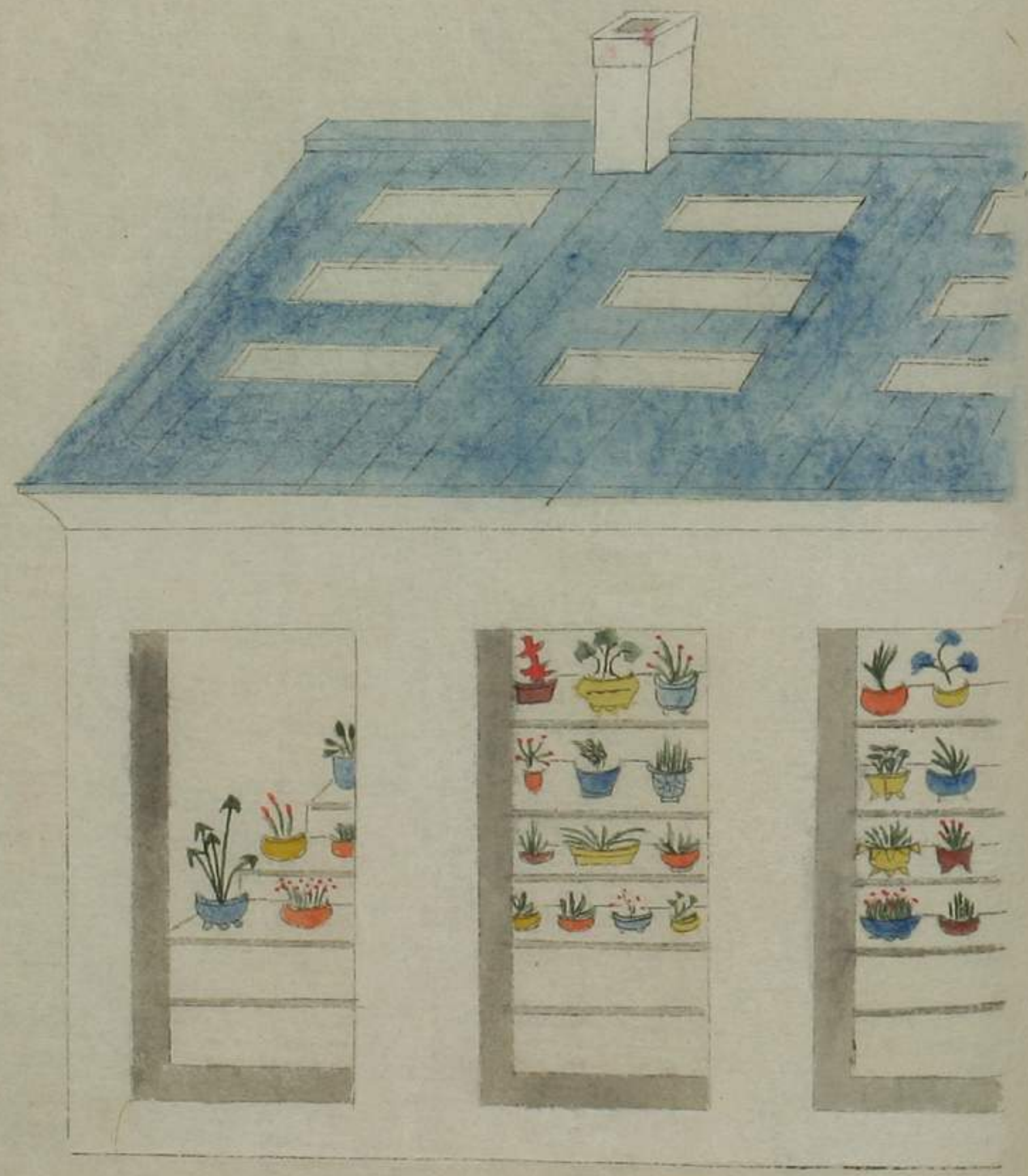
一 氷りの如き塩あり惣て山塩の由

前にもつらつらと歩行も府内を通行せし支り外
出の度毎車上の硝子障子より覗き見らるるまてかき
ハ委しき事見え及らる

一日國王の御涼所といふ所へ遣し一見いとませし

按し御涼所といふ處を何といひしや別館
遊苑の地なりといふ光大夫曰此所をツワルスコイセロ
といふ國王五月晦日つらつら引移りて七月
晦日迄居住し玉ふとたり

此所を都下より七八里あり此道筋川端なり皆大造な
る鍔の欄干あり先きへ行きて詔免壹里程の間長屋の
如く建並らるものありこれ鉢植物の室なり戸を
開き千品萬種の鉢植を並置り寒冷に至る
皆内へ入る屋根の硝子障子にて日影を受る様
あり



其別館構への内へ入ると大泉地あり箱根の湖
水程もあまきう其内の軍船の雛形を海へ置り
三階作りこく石火夫窓もあり繞に五六人を
乗すく——奇麗なる作りかえ遠見せし近
く近付きて見れば殿閣あり内の様子も
委しく見れば芝居座もありまき城見物や付ら
せり次に出す

廣度の内より長さ一町程の棚を架し是より
纏ひをひきり異木ありいづれも枝葉を
て根をかきり様子なり葉を樟に似て圓く花
紫こく藤豆の如し





按此木榕樹シロクマ南方草木狀曰榕樹
南海桂林多植之葉如木麻實如冬青
樹幹拳曲云々又枝條既繁葉又茂細
軟條如藤垂下漸々及地藤稍入地而生
根節或一大株有根四五處而摸枝及都樹
而連理云々又此樹の事桂海虞衡志
泉南雜志五雜俎百川學海海槎餘錄
南產志廣東新語等ニモ出ス和蘭ニハ
ウキルテルホー根ト譯說曰其初生不異于他樹
後枝上細條飄蕩下垂及地則生根又而
成大株與木幹無異無數連結成巨林其高

参天枝葉ト蔭々周圍有及意大里亞里
法之一里者其枝條亦各出細根纏々垂
地近望之殆如以繩索掛樹枝者

我邦薩摩土佐紀伊等亦此樹

アリ紀州方言アユノ木ト云根ト如

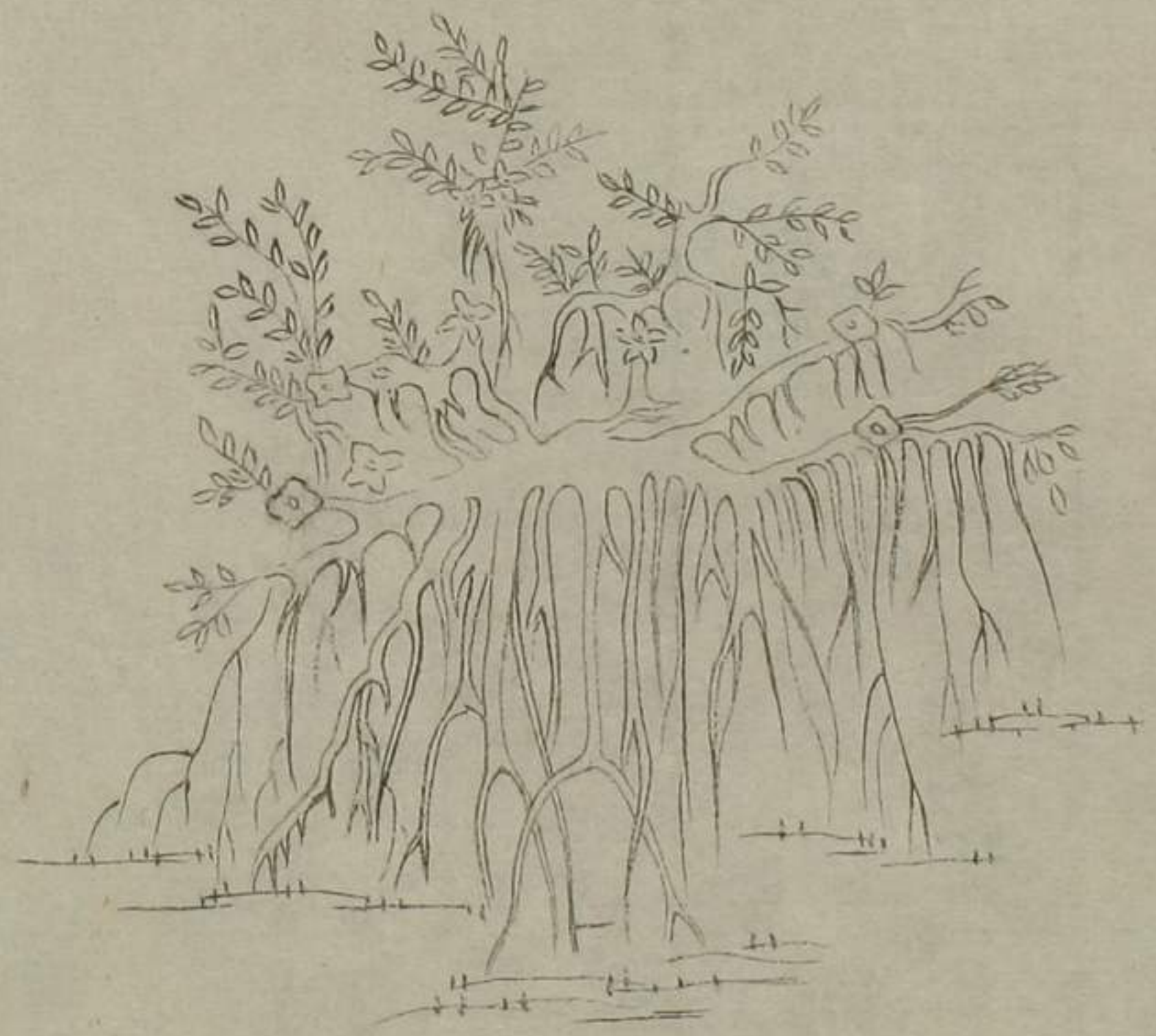
琉球ニモ產スト云薩州大嶋方言ニ

カスニト云シ本ト此樹ハ暖地ノ產ト

見ユルナリ

蘭書所載

ウチル^根テルホ^樹ム^園図



此餘見馴さう種々の千草萬木あり

雞冠花石竹花鳳仙花なども見さう鉢植

もかき^の柄をうけさう桶多し

其庭園右往左往は通行の路次第き土

よて堆へし金砂の如きものを交へ塗りたる

見へる^{赫々}光さう築山の上は櫻木も

見ゆ

此節帝王皇后母后も供奉あり

其殿中の芝居を見せらるし舞臺十間程あり

魚^{トモ}四方を塞きし暗黒^{ツク}なりぬ^ク蠟燭を

点^{トモ}しなると白昼の如くす此日王女あり

陪従の方々と漂流人のこゝにて外の者の見物あり
王の見物所を正面なり此所へ国王の方々入らせ玉ふ
を相図は舞臺より笛太鼓なるの類をあらうし
其音声は應じて王の歩行も拍子をとらうて入り
玉ふなり柘舞臺の前通りは伶人並居笛太鼓
琴胡弓等乃吹物をあらうと淨溜理大夫のかき
本を持ち其なり物もあまをせし音曲をかき
舞臺よりいろくの繪をかき幕をわく狂言の
仕組も諸国の芝をいともやうも幕あはる仕組
かき續きそのと見へは本國の事をすむ取
惣て本國風なり

草鞋ををきし者あり昔も彼國の
土人^{リロポウ}も^{リロポウ}を用ひしと見へる大光曰草鞋は作まらざる
又黒人の國の事を致す時を家作り并は男女
共は黒く彩りは衣束其外もて其國の風俗なり
戲子の男女よく男も男女も女なり田力よて女形と
さす也あり暫時の間は老少の姿かたりて舞臺
出は言語も更に通せしむも一躰の模様心持は此方の芝
居と同様なりやうもく踊の狂言は男女拾五人程宛
両方に分ましくおとす其中別は高き山巖の上は女三人
登り居る其岩志をく縮り下へ落着くは其女子
飛下り踊り連走しもあり其人教踊りかく五六人

程飛より一足よしてくらくめくくして踊るもあり此眩
見物人を手を拍て譽るなり王感心して手を打つ
事あまは見物人も皆是は應じて打つ社な
ん様子

あゝあゝ右の趣なり一躰の仕組言語もさう
ら思ふ又故番くく合点せさう事

其後又一日市中の大芝居を見物せしむる
家石造り屋根圓く内の物躰まらくつくり
たるもの見物所も土間棧敷と言ふる面
段々下り下棚をかきたるもの千人不も入る構なり

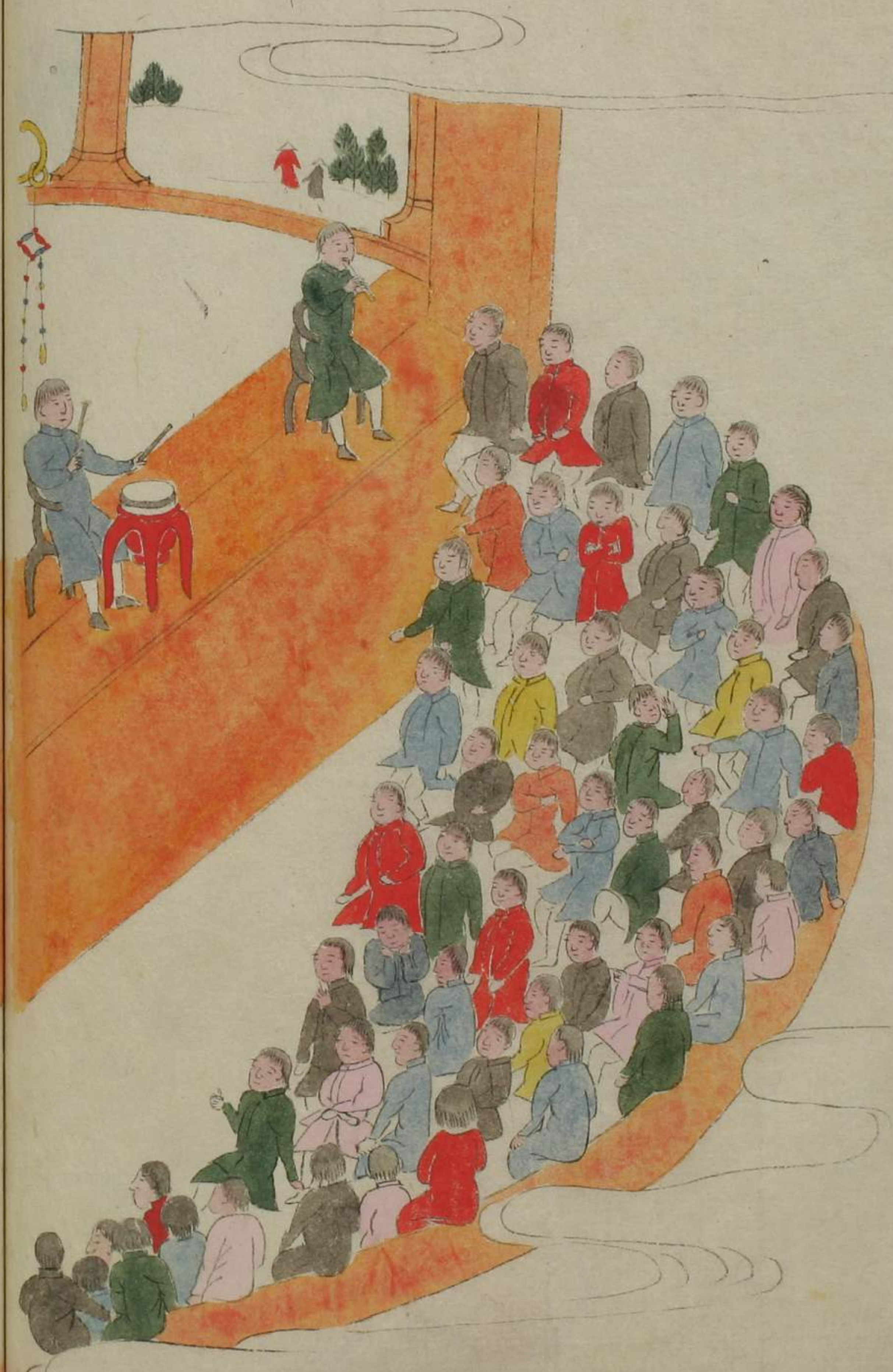
是き又四方夜塞き暗黒より蠟燭を真
家の真中へ硝子の火燈籠を下く内は教杖
の蠟燭を点く雌羽は段々下の方程ろろ
の敷をまきけけめ仕りけなり誠明朗なる
昼よまきまき程遠く見物する者遠目鏡虫目
か祢もく見物し居る

此芝居も國王より建置るよし木戸銭一
最銅銭五百枚宛なり如何の割合あるや
此錢も上へ納るよし芝居狂言の仕組
なと往日宮の別館より見せし趣
よさして替る更なり折くハ王と

見物に入せしむる夏と見へて 別段了
腰掛も設け置あり

此日歸路も夜も入りきり五月の末と覺へし
歸りの羅紗の合羽様の物を別と着用せし
大ひは寒く冷と覺へきりき

此日歸路も夜も入りきり五月の末と覺へし
歸りの羅紗の合羽様の物を別と着用せし
大ひは寒く冷と覺へきりき



又一日捨児を養ふ所へ行つて見せらるる
此取町の内々一町半四方の長屋の構へなり内々
夫々仕切あり大小の知童居まり入口は其子供
の名を書付てあり

知児の卧す床臺見ゆ乳母もあり縫裁スイモリ
洗濯飲食等其役方備へ置て養育す
生長に従ひ世々セセ祝吉事いそす好む取
の事業を教ふなり此館内は在る知の
男女生長の後色く細物なりなり
公上の利用となるも亦少くはなかり

按は政羅巴洲地方此設あるより明人

知院と譯チエンをりもの是なるへ漂流人等
ありあかりて見ゆ其の疎踰遺恨と云ふ
嘗て光大夫の話を傳聞せし都府中
設る所の知院大造の構へなり其構の内
通りは外より通り抜の道あり益々人々
往来勝手次第なり夜は金鎖出入
を止む相国中の貧窮なるもの子を生ま
てと養ひえこむる事すくなく困厄す
との多し國王両全の方便を以て是を
建の表通りは窓あり捨児せんとする
人夜中せこは到り其窓をぬき音

あつ内より引出しの如き箱を出す其
内へ其見を合し尤其子の生ましし年月
日時を記し牌ヲを合し歸るなり内
は是を受取く乳母は育て生長は
従ひ館内は諸君道の師道ありて夫々
の稔言事をあらわし先に男女知童童の好む取
の支業ありは後くは公用は使
役をあらわし乃に見童を置く家の戸
口は何月幾日何時生る子を云事
をかき牌をかける有り又其父母なる
者官の恩徳は何程は育ち如何

出したりなりし以て容子見度思ふ時も
思はれし右の通り抜の道城通り尤右の牌を見
是を我ら子なりとし又を知る其生
長の程も時々見る也をさらの考めり
かく設け置く又人相をひ戻して我
家は入まんと思ふ時は其館は入ましし時の
年月日時を認め役所へ願へ戻し是
玉はなりし此時定式はき定る銀子
を給ひ且官の費用はき玉人な
きを一官爵を授け返し是より
是より国中路傍は捨子と云事

病人養生所もありと聞き是は噂のこゝにて
一見せむ

梅は在々田舎迄も設けありとなきは必
大役所あり一々名は何と云ふも是を病
院と譯せり學校も所々も設け有る也
と見ゆ都府の圖も見へあり

「ハウラツケ」と云所ハ町の内ち廣場はく火除地の
様なり所なりこゝも都下の真中にもあるも如何と
思ふる午前の方より輕番所あり前は川あり
川向ハ町家にて繁華の所は此廣場は此都を

開き帝王の位を履きしと云王の唐金像あり
一丈四五尺程あり石を疊みあげ廻りハ鐵にて三四
拾間四方より玉垣を圍ふ相其臺より唐金鑄
りて馬に騎りたる王の像を建川左りの午より
午綱を持って右の午をのてし馬は大白蛇を
ぬき人さきも軀は常人より丈高く頭奉毛
顔色逞しと耳も鼻も至大なり

往來の人通りあり見遇すまては腰
を屈りたりと云又と云し此方の惣は佛とも
いふをき様子なり



此王の名ハテルバイトロバウロイナト云ル由

大光曰「ペートルベルナイン」和蘭ニアゴロトル

ゴロトトと云ふ事

此地を「ハウラツク」といふもハウロイナの像有
 故とて生國「ウラセイメル」といふ所の人と有と
 漸々國を廣克帝位を回復て此「トルブル」
 の地も併せて新都を闢き「」といふ崇り
 をたせり白蛇を殺して諸民の難を救ひ
 事ある故此像も夫をうつせりと云ふ

按譯說曰「ハチルユ 嚙羅第」墨兒メル「シ 屬テ魯西

垂曆救九百二十八年本朝正長ヨリ魯西垂

國王爰ニ都ス一千三百年本朝正安此
地ヨリ都ヲモスコウニ遷ス此府ハモスコウ

ノ東ニヨリ

日本里数七十二里ニ在リトウラセメ此の
ウチロジメ也

此新都ヲ開キニ由來年曆并ニ

其王ノ傳記諸書ニ見エ譯説別ニ

有リ

左平傳聞ニ此都原ハ雪際スウエーツ臣の領内

ニテありしが此王の時午ニ金ことりと此王

諸藝ニ通達し諸國を終歴する際

賤しキキニ細工類をも枕古せらき自ら作り

玉ふと云物共一ステライト云大寺ニ納め

置りし船の造りかとも此国ニテ此王より

始りし又諸工職の者も其細工より

空腹もなり易く腹十分ならずさはらず

手こなりかきものへ自ら工職をなり

試み知る知たりとて諸職人へ渡り扶持方

給分の多くをも其職分へ相應し法を定

玉ふと聞り

一日都下を餘程へるきしトノステライト云大寺へ

一見ニ遣しり

其地へ至りしト大寺あり石造りの内ニ金銀

にて飾りたる佛像多し其中一人長けよ
立るる佛或は腰を懸きもあり尤四面額
に掛るる佛像あり縁ハ金銀も飾りたる故
光明赫耀なり

寺中ニ靈屋の如き所あり靈寶殿ニ籠め
をくよし「ペテルバイトロバウロイキ王の在世の
時用ひありしと云 枕又長サ二尺一寸餘も
あり鍔の杖あり葎藤の内へ是を仕込あり
又何物をあらず唐銅の板ニ横文字を彫り
付るる物もあり其外王の千細工の品々々々
種々ありあけし教へ尽ししかるや

此寺ハ諸王曆代の靈屋も有るうと思へる和蘭
伴僧ともしるる者との七八人召具して漂流
人へ土會せり冠りとの黒縮緬にて日本の婦人
の用ゆる袖頭巾と云物も似たり下着ハ筒袖
よく「ケレス」といふもの付るるを着す其上
衣ハ「ズウイグ」といふ星の付るる物ハ国王の
御衣と大抵同一様に見ゆ同行の新藏も
本國の宗旨より入りし由りハ「和尙經文
の如き」といふと出くはるるなり

按「コノステライ」ハ尼寺の事と聞ゆまハ
尼僧なるべし此寺の縁起委しき事あり

魚くらしを一通り見遇せし遺恨なり
都下第一の大寺なりと云所哉一見志あり名を
イサカツケゼレロウと云町の内はあり石作り柱等磨
きききたる石より大造なる經營なり普請未と全
備せしと云前代の王の遺骸を乾し固め棺へ歛め
一年は一度死開くこと此コノ昔もウラセイと云所
は葬埋し置ける其墓より怪しきと氣立し故
発掘して見れば其コノ生人の如くありしと其後
此寺へ移してかく大寺を造立せしとなり
按てペトルブル都府の国寺觀符疏を引キ
サンダラ子エフスケイの寺觀也とあり

和蘭 非蒲涅爾 所撰樂地の書に此國往
昔の賢王アレキサンデル子エフスケイといふ
王英雄ありて且徳儀あり人也故に今小
至し土人は是を祭す ペトル帝新都を
建し是に此王の柩をウチロジメルの地より
遷して寺觀を建てたりと云々 漂流人の話
符合す

歸帆前使節山サノツトの家へ往きし日本尺
二尺四寸程ある小人を見きり酒宴の中座中の
人食盤の上のせ戯弄しつひに漂流人を指さ
して小人は告げ彼等日本国の人と汝ももふ

彼國へ渡るへし金銀其外望の品與へらるへし
と戯まじりし日本へ行くいやはなり彼人も日本までハ
あるまじくカメイカ人なりしと云ふ此小人何方より
来りしと問けまハカレラと人々答へず是國の
名も又小人といふ惣名も詳しき小人年二十
七歳なりと形も小かくして髪も短くありて年長ハ
ぬもく見へし詞もカロシヤと辭をつらハ服も本
國物を着せり

按北邊の尺々境ハカモエデニと言國あり
其王人皆矮小なりと近頃魯西亞の所領と
なまじり必ず其國人なりしと云ふカモエデに譯説

別あり世ハ小人島といふ事ありたゞ
寫しあるカメイカを何處の地方り知らざり
し也近時カロシヤに屬せし國のよし漂客
等カイルコウツカに逗留中カメイカ人といふを
見し者有り髪ハ黒く頭ハ魯西亞人同様
なまじりも丈ハ日本人程ありしと



右見聞の支共百分二もいひかゝるべし
皆々出行の車馬の取扱布て見物不自由
かりと又無雅無心の疎漏なりと此二も
己む支を得きこゝろを和蘭書中小トルル
の都府圖あり是を出し示せし小望洋と
して知り分ちかぬし彼ら是れとせし近
茂質別し其圖を真し畧説を附し参考の
一とせり

其年六月十日と覚へカラコより 役人を以て渡させ
し此度日本へ使節船渡海致すに先づ歸国願ひ漂
流人共四人右船へ同船送届間出立用意可致趣人

各大悦し一同に雅有旨請中書にあり

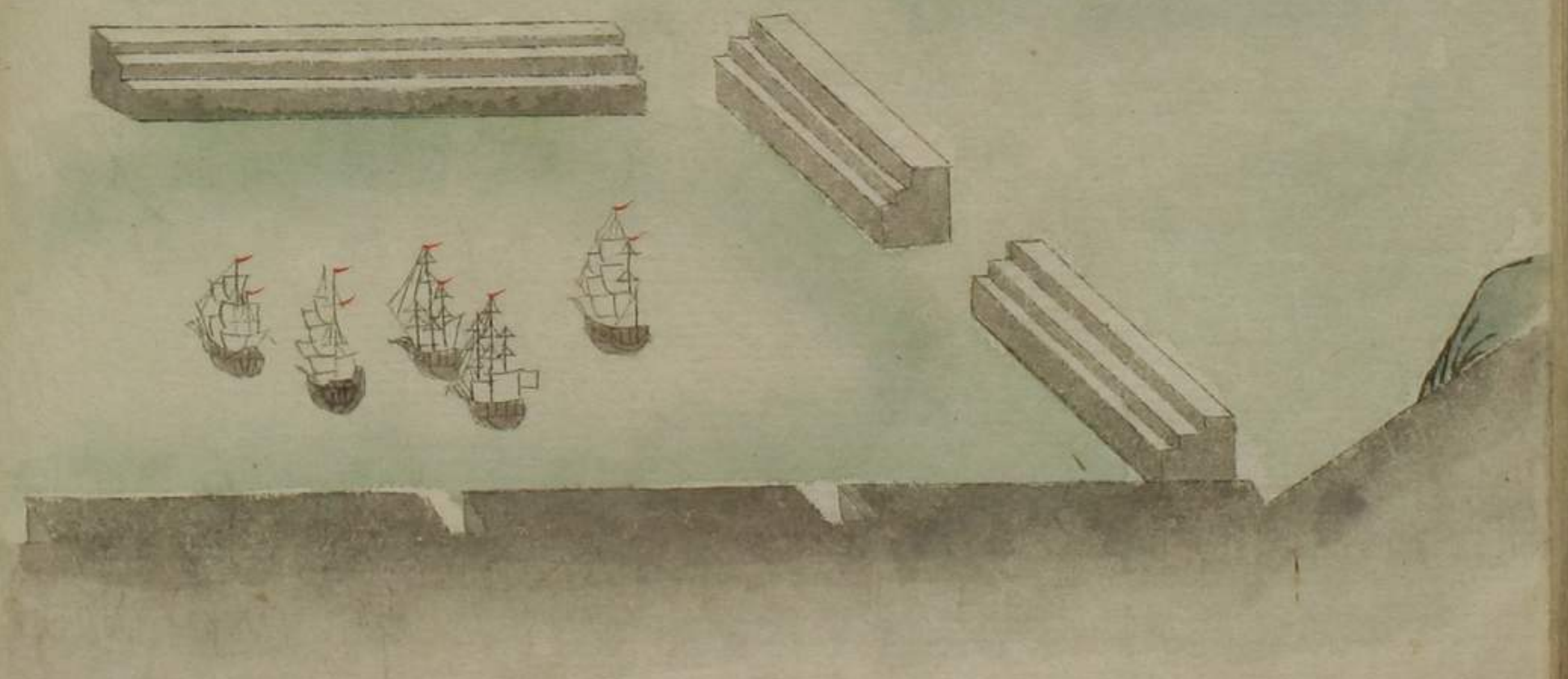
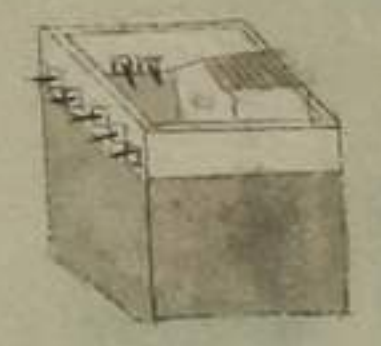
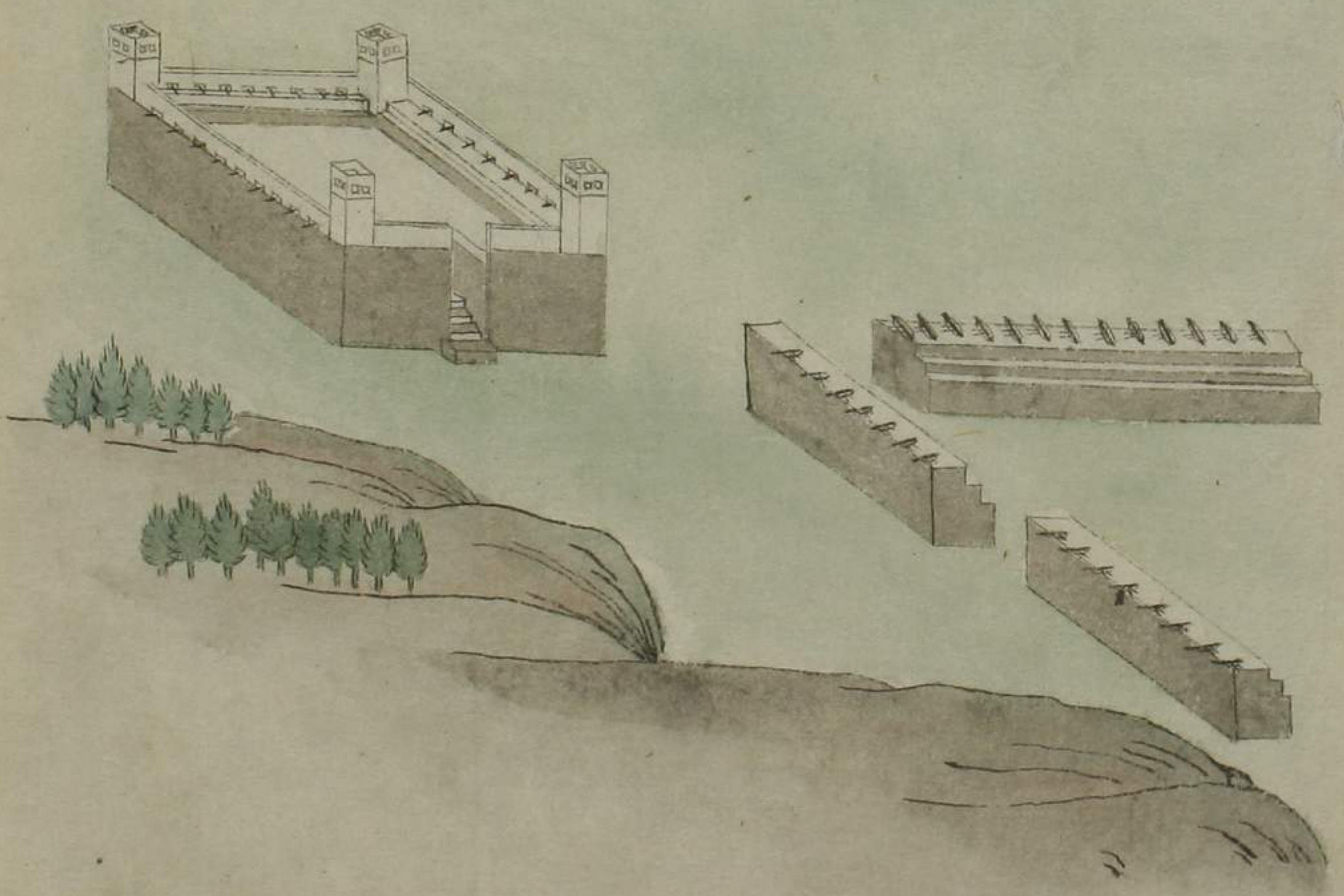
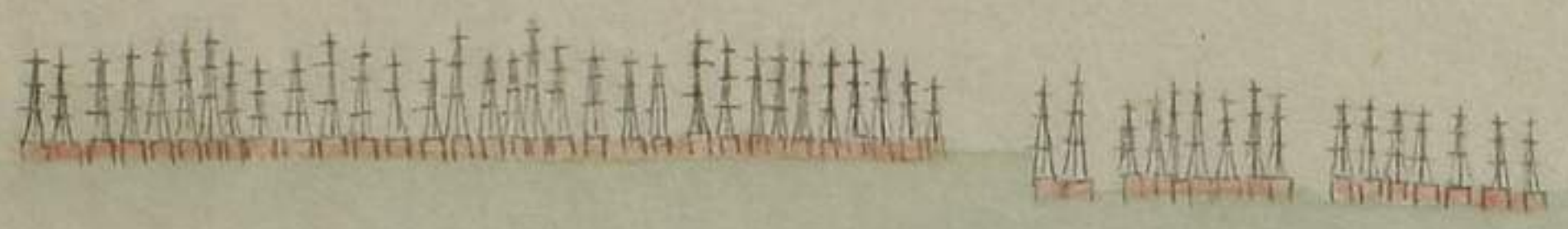
四人共使節の役口サットし被呼出罷越せし
船中用の諸品衣服等與へり

翌十二日津大夫儀平左平太郎此所出立居残
六人の者共暇乞を為し尤旅館中是迄世話を
受し人々も夫々一禮して別を告げて昼退頃即
カラコの屋敷前なる尼花河より直に小舟に乗
荷物積入カラコの役人三人并に新藏も同船し
北より南へ向ひて川筋を下まじり川幅を次第に廣
なり二十五里行き「カナスダ」と言所へ着す

此所「トルフル」の都へ出入る湊口の由至て要

船共の帆柱の立ち並へるを恰も雜木林の如く其数幾百と斗へかく此内は本國の番船もあつて是外國より襲ひ來軍船もあるかと窺ふ爲くと千五百人乘の自國の軍船もあつて繫ると云此船槓立本立なり遠見は山のふとく見ゆかろ軍船の大イなるもの此國より始めて造まつると此船より境と昏と西度かてりろを發つ是軍船の大法なりとて本船中より菜園もあり牛馬の厩もありとたり

加那斯達港築出之圖



右大船汐子の節港出しをすむる本船の
西船へ大なり空船を一艘宛鳥の羽異の如く
つかまはる本船の行きとる様より出すと云

按り此カナスダと云湊ハ和蘭国にて譯
して呼べる所のコロニスロットなる故和蘭人の
書きたるコロニスロットに於て使節船
の用意ありと有れハ和蘭所撰魚島
亜國志はコロニスロットハ新都ベトルブル
カを去る度ドイツランドの里法にて凡そ
四里舟船湊會の要港人居蕃盛なり
なり要害を構へてその所より富々所徳

海は流しと云々

大光曰カナスダハカラスターホストロロカ
る地がとある嶋にて都より重
隔てりといふ再ハ漂客推乃来る大洲
分圖を熟閱するべトルブルカより
少離さし一島あり其名を彼國
字よりコロニシタトと記せり必ず此處
をカナスダと聞誤りて云ふなるべし

同十三日 此湊より一里餘沖へ哨船にて溜出る日本
使節船へ乗移せり

使節の役口サノト止る先達て船の中ニ在り

船中諸吏の用意をたし船頭其外せき去く
の役々を引揃ふ何きとレサソツトの前へ出遠方
護送を預る謝儀を厚く申述り使節
會叙有て金錢二十枚と襖時斗一ツ宛
相渡も是國王より各賜る処とそ銘を
拜謝して是を受く

カウロも取次此本船へ乗り込見分其外
中渡の吏も有りしは且何きもの拜領物直に
可相渡の処皆々出船も遅る本船の乗船も
延引となり故此等の事使節へ附囑り
都へ歸り由途中行違ふなりと吏と

是國王誕辰の祝事あるの日よ

指かきりとして急き歸都のよし

船中の人の話先達て國王も此所迄来らま
船も乗り玉ひ船中の様子一覽せらま同
船の者も遠路達者よ海路日並日本
の吏をも委し見て歸れよと命ありと
詰まり

此日カウロより附添来り三人并コライ新藏も
暇をりて都へ歸まり

本船乗組の人数役人を大抵二拾人せり船方の者
四拾人餘も有りしと覺ゆ

別巻よ
詳しむ

命入籍... 本編... 九日... 命入籍... 本編... 九日... 命入籍... 本編... 九日...

命入籍... 本編... 九日... 命入籍... 本編... 九日... 命入籍... 本編... 九日...

環海異聞卷之十一終



